

”黒い木の間蝶”という名で、雑木林の暗い林床を棲家とし、落葉の上に羽を閉じてとまっているときには、右図に示すように翅裏の様子が落葉と同化してしまって、そこにチョウがいるとは

容易に確認できない、そんな見事なカムフラージュを得意とするのがクロコノマチョウだ。筆者は高知市で過ごした小学校時代に本種の標本に「コノハチョウ」というラベルをつけて高知市主催の科学展に出品し、後に中学校進学でご指導を仰ぐこととなる審査委員の故岡本盛康先生に、クロコノマチョウの間違いだよとご指摘いただいた思い出深いチョウである。幼虫はススキやジュズダマの葉を食べて育つので、



近くでみかけても不思議ではないのだが、通常市街地で見かけるチョウではない。ところが、2009年11月21日、テニスを終えて帰宅した玄関先ポーチ部にまぎれもない本種が羽を閉じた静止状態で出迎えてくれたときは驚いた。もともと南方系のチョウで、近年特に早春、加古川市志方町周辺の雑木林内で越冬個体を見る機会が増えてはいるのだが、雑木林などが全くないこんな住宅地にいったいどういう経緯で現れたのか。本種は雑木林内でも、驚かすとピョンピョンと跳ね飛ぶようなランダム飛翔で数メートルも飛ばすすぐに羽を閉じて、あたりの落葉と同化して姿を見失う、そんな挙動が特徴的で、一気に長距離飛翔をするようなチョウとは思えない。そのような



珍しい飛来記録なのに、玄関を通らねばカメラを持ちだせないわけで、結局じっと静止するチョウに近づいてそっと羽をつまむと不思議にも簡単に捕獲できた。すぐに吹流しの中に取り込み、底部に落葉をしいて室内で越冬できるかどうか観察を続けたのだが、時々霧吹きで湿気をあたえ、その際には驚いて羽ばたくなど元気を保っていた。室温



が4-6℃で野外では零下となる寒波が数日続いた12月21日、吹流しの下部につかまるように静止していたチョウが落葉のあいだに降りてじっとしており、場所を移しただけかと思っよくみると、残念ながら息絶えていた。仕方なく標本にしたが、秋型の特徴である前翅のオレンジ紋が右前翅で色薄く、羽化してからかなりあちこちと飛び過ぎてきた個体だと考えられる。6-8月に発生する夏型はこのオレンジ模様がなく一様に黒くてお世辞にもきれいだとはいえない。1960年代、郷里の高知市五台山の山腹：ススキの茂る山道沿いで、食痕のあるススキ株の葉裏周辺をよく調べると、グリーン一色のきれいな蛹をみつけることができたが、ますます人が山に入らなくなった今でも、豊富なススキ類で発生を維持しているはず。



クロコノマチョウは、地球の温暖化によって北方へと分布をひろげているチョウである。

Oct. 27, 2016 和歌山に遠征

妻が暇任せに日和山へと入り込んだ際に足元から飛び出したチョウがいたようで「このあたりにコノハチョウはいる？」と聞いてくるので、クロコノマがいたのだなとわかり、確認しに暗い樹林の林床へと踏み込むと、いきなり 2-3 頭のクロコノマチョウが飛び出す。そのなかの 1 個体の飛翔を追うと、すぐに林床に静止するが、よく見定めてから近づかないと静止位置を見失ってしまう。



July 17, 2017 珍チョウが飛来

高砂市松波町の自宅周りほどちらかといえは都市の一部で、自然豊かな野生的環境ではない。そのような自宅で水やりをしていた妻が「珍しいチョウがいる」と呼ぶので確認すると、なんと



夏型のクロコノマチョウ。南側庭の植物影で休息していたところにいきなり水を浴びせられたため驚いて飛び出し、北側の駐車場横へと移動したのだという。撮影のために近づきすぎて一度場所を変えるが、すぐそばに止まってくれる。その後、数分も経たないうちに飛び立って行方を見失ってしまったが、我が家へのクロコノマチョウの訪問は 2009 年 11 月に秋型が玄関のたたきに飛来休止して以来の珍事で、住宅街裏手に部分的にススキ原があるとはいえ、果たしてここで発生した個体なのかどうか、謎のまま。



Mar. 30, 2023 珍客飛来

窓越しの庭先にまさかの八重山産ルリモンジャノメのように見える黒っぽい蝶が舞い降りる。急ぎビデオカメラと OLYMPUS TG-6 をもって駆けつけると、すまし顔で鎮座していたのは越冬明けのクロコノマチョウ。以前にも玄関先に飛来したことがあるが、あれは越冬前の晩秋（2009 年 11 月 24 日）。ススキもジュズダマも近くにない住宅街への珍客で、どう考えても蝶を愛する吾輩を慕ってやってきてくれたとしか思えない。

